

子どもにとって学びがいがあり、未来につながる社会科学習の構築
～進んで学び、共に考え、社会とかかわる子どもの育成～

旭教研社会科学部
の成果と課題

本研究部では、これまでの3年間、「確かな学びを生かし、社会とかかわる子どもの育成」を主題に研究を進めてきた。その結果、問題解決的な学習過程を通して、社会的事象に対する基礎的・基本的な知識を主体的かつ確実に習得させ、社会的な見方や考え方を高めることができた。また、子どもの学習状況を計画的・機能的に見取り、指導と評価の一体化を図ることもできた。

一方で、子どもの立場から教材開発や単元・授業構成を検証した場合、教材の選定や学習問題（課題）への導き方、資料作成・提示など、子どもの思考状況をより考えて授業づくりをすることに改善の余地があった。

道社連の研究
とのかかわり

■北海道社会科教育連盟 研究主題・副主題

主 題 自ら参画し、たくましく生き抜く北国の子の育成
副主題 未来を切り拓く資質・能力を育む社会科学習

道社連が打ち出した新3か年テーマは、本研究部でこれまでに積み重ねてきたこと、これから深めていかなければならないことと共通する部分が多い。そこで、道社連の研究に本研究部会のこれまでの成果と課題を生かし、「旭川の社会科学習」を提案していく。

今後の教育
動向との関連

現在の子どもたちが社会を担う頃、激しい変化が予想される。そのような社会でも生き抜くことができるように、中央教育審議会教育課程企画特別部会は、次期学習指導要領等が目指す資質・能力として「三つの柱」を挙げている。

■育成すべき資質・能力の「三つの柱」

- 1 何を知っているか、何ができるか（個別の知識・技能）
- 2 知っていること・できることをどう使うか（思考力・判断力・表現力等）
- 3 どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びに向かう力、人間性等）

これらは、学校基本法30条に定められた「学力の三要素」を出発点としながら、学習する子どもの視点に立ち、整理されたものである。

また、課題の発見・解決に向けた主体的で協働的な学びの視点からの学習・指導方法の改善も求められている。

このように、次期指導要領では、子どもの立場での資質・能力の育成を目指していると読み取ることができる。

新3か年
旭教研社会科学部
研究会研究主題
について

これからの研究では、学習者である子どもの立場をより意識して社会科学習を構築していく必要がある。そこで、研究主題を「子どもにとって学びがいがあり、未来につながる社会科学習の構築」と設定する。

「学びがいがある社会科学習」とは、子どもが日々の学びの中で充実感や達成感を自覚させる学習を想定している。また、「未来につながる社会科学習」とは、子どもが未来社会において生き抜くことができるための資質・能力の育成を目指した学習を想定している。子どもの現在と未来、相互のつながりを考えて社会科学習を構築することを目指す。なお、具体的には以下のような学習を想定する。

■子どもにとって学びがいがあり、未来につながる社会科学習とは

- 自分と社会とのかかわりを実感できる内容を扱った学習
- 子どもが自ら問いを見付け出し、主体的に調べ、考え、答えを出せる学習
- 他者と協力して調べたり、考えたりして問題解決していく学習
- 学びを通して自らの成長を実感できる学習

研究副主題と
小・中7年間
を通して目指
す旭川の子ど
も像について

もし、このような社会科学習を展開することができれば、子どもから学びに対する主体性・協働性、社会参画への基礎的態度が表出されるであろう。そこで、副主題を「進んで学び、共に考え、社会とかかわる子どもの育成」と設定し、以下のような姿が表出されることを目指す。

■小・中7年間を通した目指す旭川の子ども像

研究副主題	小学校卒業時	中学校卒業時
進んで学ぶ子ども	<input type="checkbox"/> 社会生活についての知識や観察・資料活用の技能を主体的に身に付けている子ども	<input type="checkbox"/> 公民としての資質につながる知識や資料活用の技能を主体的に身に付けている子ども
共に考える子ども	<input type="checkbox"/> 社会的事象の意味や特色、相互の関連について協働的に考え、説明できる子ども <input type="checkbox"/> 社会の課題を把握して、関わり方を選択・判断し、説明できる子ども	<input type="checkbox"/> 社会的事象の概念について協働的に考え、説明・議論できる子ども <input type="checkbox"/> 社会の課題や問題を公正に判断し、説明・議論できる子ども
社会とかかわる子ども	<input type="checkbox"/> 社会のできごとや我が国の歴史に興味や憧れをもち、よりよい社会を考えようとする子ども	<input type="checkbox"/> 社会のできごとや我が国の国土・歴史に広い視野に立って関心をもち、他者と共に社会の形成を参画しようとする子ども

※これまでに小・中研究委員会間において、授業を公開し合ったり、研究成果を交流したりすることで、学習内容や指導法、子どもの実態を確認してきた。これからの研究では、さらに踏み込み、7年間を見通した子どもの資質・能力の育成を目指す。

「目指す旭川
の子ども像」
に迫るための
研究の視点

「小・中7年間を通して目指す旭川の子ども像」に迫るために、教材開発と学習展開の両面から社会科学習を考えていく。教材開発については、子どもが自分と社会とのかかわりを実感できるように、何を学ぶかを明確にする。また、学習展開については、問題意識をもって主体的・協働的に追究できるように、どのように学ぶかを明確にする。

■研究内容

- 1 子どもが社会とのかかわりを深める教材開発
- 2 子どもが主体的・協働的に追究する学習展開

研究内容1に
ついて

子どもが社会とのかかわりを深める教材を開発をするにあたり、以下の3点を重視する。

■社会とのかかわりを深める教材開発において重視すること

- ①社会に対する関心を高める教材の選定
- ②小・中7年間を見通した身に付けるべき知識・技能の明確化
- ③目的や表現方法を熟考した資料の作成・提示

①については、社会に対する関心を高めることを目指して教材選定する。小学校では、主に共感的理解を深めることができる旭川の社会的事象を、中学校では、主に社会の本質に迫ることができる社会的事象を取り上げる。

②については、多様な知識を「用語・語句」「調べて身に付く知識」「考えて導き出す知識」の3種類に分類し、「知識の構造図」で表す。小学校では、最終的に社会的事象の意味や特色、相互の関連に関する知識、中学校では、概念に関する知識を習得させる。また、小・中連携の観点から、7年間の学習内容のつながりや、単元を通して身に付ける技能を明確にする。

③については、目的や発達段階に見合った表現方法を熟考し、資料の作成・提示をする。小学校では、資料の提示の際に、活用の視点・方法を丁寧に指導する。また、中学校では、主体的に資料を活用できるように作成する。

研究内容2に
ついて

子どもが主体的・協働的に追究する学習を展開するにあたり、以下の3点を重視する。

■主体的・協働的に追究する学習展開において重視すること

- ①学習問題（課題）と向き合いながら、子どもが主体的に追究する単元構成
- ②社会的事象の意味や特色、相互の関連、概念について協働的に考える授業構成
- ③子どもの資質・能力をバランスよく育むための評価

①については、主体的に学習問題（課題）の解決を進めていくことを念頭に単元構成をする。小・中学校ともに、主体的に解決することへの充実感や達成感を自覚させること

を大切にし、子どもの思考に寄り沿って学習過程ごとに工夫をする。また、単元の中で学びの状況や成果などを振り返る場を設定し、学びに向かう力を高めることを目指す。

②については、社会的事象の意味や特色、相互の関連、概念に関する知識を習得するために、協働的に考えを深めていくことを念頭に授業構成する。小・中学校ともに、集団による話し合い（練り合い）の場を大切にし、思考を活性化させたり収束させたりするための工夫をする。

③については、単元に観点別の評価規準と評価方法を適切に位置付け、指導改善や学習状況の見取りを目指す。なお、小・中学校ともに次期指導要領を見据えて「育成すべき資質・能力の『三つの柱』」を基に、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点で評価活動を行う。ただし、評価の際には、現行の4観点到に振り分けて評価する。

社会科学習の
基盤

社会科学習を成立させるためには、日々の学習指導の積み重ねが必要である。以下の項目を社会科学習の基盤として、継続的に指導していく。

■社会科学習の基盤

- 自分の考えを分かりやすく伝える力の育成
- 小集団（ペア・グループ）での話し合いの習慣化
- 生徒指導の機能を生かした授業づくり
（「自己存在感を与える」「共感的人間関係を育成する」「自己決定の場を設定する」）

特に自分の考えを分かりやすく伝える力の育成については、協働的な学習を進めるにあたって重視する。「なぜなら～」「例えば～」「つまり～」などを用いて、考えの根拠や具体例、要点などを意図的に伝えることができるようにする。

研究成果の
共有化

旭川市の子どもたちの資質・能力の底上げのために、本研究部会での研究成果を旭川市の各小・中学校において共有化することを目指す。ホームページ等で研究成果を随時発信していく。

■研究成果の共有化

- 旭川市の各小・中学校へ指導案・資料等の配付・配信
- 旭川市の各小・中学校での追試の啓発活動

※旭川市教育研究会社会科部会 <http://kyokusya.net/>

研究の重点化

新3か年研究の1年目は、子どもたちの資質・能力を育むために、2つの研究内容から細分化された6つの研究の視点、さらにはそこから派生した社会科学習のための指導の基盤・研究成果の共有化と多岐にわたる。そこで、各学年・分野においては、研究の視点の焦点化を図り、主張ある社会科学習を構築する。

旭教研社会科部会（小・中）これまでの成果と課題 ○身に付けさせたい知識の明確化 ○学習問題（課題）を軸においた問題解決的な学習過程の定着 ○学習評価の指導改善、学びへの充実への活用 △子どもの思考状況を第一に考えての授業づくり	北海道社会科連盟としての問題意識 □「学力格差問題」 □「求められる人材」 □「我が国・世界が置かれた状況」	次期学習指導要領（論点整理）との関連 □育成すべき資質・能力の「三つの柱」 □社会に開かれた教育課程 □アクティブ・ラーニング □カリキュラム・マネジメント
--	--	---

北海道社会科連盟 新3か年研究主題
 自ら参画し、たくましく生き抜く北国の子の育成
 ～未来を切り拓く資質・能力を育む社会科学習～

旭教研社会科部会 小・中研究委員会 研究主題
子どもにとって学びがいきなり、未来につながる社会科学習の構築
 ～進んで学び、共に考え、社会とかかわる子どもの育成～

小中7年間を通して目指す旭川の子どもの像

研究副主題	小学校卒業時	中学校卒業時
進んで学ぶ子ども	□社会生活についての知識や観察・資料活用の技能を主体的に身に付けている子ども	□公民としての資質につながる知識や資料活用の技能を主体的に身に付けている子ども
共に考える子ども	□社会的事象の意味や特色、相互の関連について協働的に考え、説明できる子ども □社会の課題を把握して、関わり方を選択・判断し、説明できる子ども	□社会的事象の概念について協働的に考え、説明・議論できる子ども □社会の課題や問題を公正に判断し、説明・議論できる子ども
社会とかかわる子ども	□社会のできごとや我が国の歴史に興味や憧れをもち、よりよい社会を考えようとする子ども	□社会のできごとや我が国の国土・歴史に広い視野に立って関心をもち、他者と共に社会の形成に参画しようとする子ども

北海道社会科教育連盟 研究の柱

- 地域に誇りをもつ教材開発
 - 世界・未来に誇れる北海道のストロングポイント・人物の営みを教材化
 - 地域に根付く教材の共有化
- 社会的事象の意味を明らかにする問題解決
 - 単元の学習問題の設定
 - 社会的事象の意味を考える時間の設定
 - 資質・能力の育成に結び付く単元のまとめ
- 学びを支える知識・技能の定着
 - 主体的な態度を引き出す知識・技能の定着
 - 問題解決に必要な情報の収集・蓄積
 - 効果的な指導方法の共有化

研究内容1「何を学ぶか」

子どもが社会とのかかわりを深める教材開発

小学校	中学校
①社会に対する関心を高める教材の選定	
□全道・全国に誇れるとともに児童が興味をもつ旭川の人々の営みを選定する □共感的理解を深めることができる人々の営みを選定する □旭川の社会科学習に根付く可能性もっている人々の営みを選定する	□地域の問題から社会の本質に迫り、参画意識を高める教材を選定する □生徒が共感できる人の営みに焦点を当てる □主体的な学びを引き出す教材を選定する
②小中7年間を見通した身に付けるべき知識・技能の明確化	
□社会的事象の意味や特色、相互の関連へとつながる知識の構造図を作成する □中学校との学習内容のつながりを明確にする □身に付けさせたい技能を明確にする	□小学校の学習を踏まえ、概念へとつながる知識の構造図を作成する
③目的や表現方法を熟考した資料の作成・提示	
□学年に応じた分かりやすい資料の作成・提示をする □資料活用の視点・方法を丁寧に指導する	□多様な視点からアプローチし、多面的・多角的に考察できる資料を工夫する □生徒の実態に応じ、社会的な見方や考え方を高める資料を工夫する

研究内容2「どのように学ぶか」

子どもが主体的・協働的に追究する学習展開

小学校	中学校
①学習問題（課題）と向き合いながら、主体的に追究する単元構成	
□「つかむ」「調べる」「まとめる」「深く考える」のサイクルを基本として問題解決的な学習を展開する □各学習過程における主体的な学びを促すための工夫をする □学びの状況や成果などを振り返る場を設定する	□単元を貫く課題を基に主体的に学びを進めるユニットのあり方を工夫する □概念的知識へとつながる指導の重点を明らかにする □学びの状況や成果などを振り返る場を工夫する
②社会的事象の意味や特色、相互の関連、概念について協働的に考える授業構成	
□思考を促し深めるための資料提示や問い、発問の工夫をする □目的に応じた学習形態をとる（個別・小集団・一斉） □思考の可視化を図る（板書・学習ノート・ICT・思考ツール等）	□「練り合い」の手法を活用した協働的な学びの充実を図る □生徒の協働的な学びを、概念的知識へと高める指導のあり方を工夫する □協働的に学んだことを自分の言葉でまとめる場を設定する
③子どもの資質・能力をバランスよく育むための評価	
□観点別評価を適切に位置付け、児童の学びの充実を生かす □知識の定着度を確認する確認プリントを作成・実施する	□観点別評価を適切に位置付け、生徒の学びの変容をとらえる □主体的な学びを支える知識・技能の定着を促す学習プリントを工夫する

社会科学習の基盤
 □自分の考えを分かりやすく伝える力の育成 □小集団（ペア・グループ）での話し合いの習慣化
 □生徒指導の機能を生かした授業づくり（「自己存在感を与える」「共感的人間関係を育成する」「自己決定の場を設定する」）

研究成果の共有化
 □旭川市の各小・中学校へ指導案・資料等の配付・配信 □旭川市の各小・中学校での追討の啓発活動

小学校

1-①
社会に対する
関心を高める
教材の選定

社会科の学習を通して出会う社会的事象は、児童の意識の中では日常生活とは懸け離れたかかわりのないものが多い。しかし、社会科学習での大事なポイントは、児童と社会的事象との距離を縮め、かかわりを実感させることにある。児童は社会的事象と自分との距離が縮まったとき、興味・関心をもって学習するようになる。

そこで、社会に対する関心を高める教材を選定するにあたって、以下のことを重視する。

■社会に対する関心を高める教材を選定するにあたって重視すること

- (1) 全道・全国に誇れるとともに児童が興味をもつ旭川の人々の営みであること
- (2) 共感的理解を深めることができる人々の営みであること
- (3) 旭川の社会科学習に根付く可能性をもっている人々の営みであること

「全道・全国に誇れるとともに児童が興味をもつ旭川の人々の営み」とは、全道や全国、世界のために役立っていたり、役立つ可能性があったりする旭川の人々の営みを指す。そうした人の営みを通して児童に、我が街は広く社会とつながっていること、誇れる街であること、愛すべき街であることなどを実感させたい。

「共感的理解を深めることができる人々の営み」とは、社会の変化に対応しようと試みていたり、大切なものを守り続けようとしていたりしている人々の営みを指す。強い願いや、そこから生み出された知恵・行動を学ぶことで、希望や憧れ、期待などを抱かせたい。「すごいなあ!」「かっこいいなあ!」「将来こんなふうになりたいなあ!」「自分も参加したいなあ!」などという共感的・参画的な言葉が児童から自然に出ることを目指す。

「旭川の社会科学習に根付く可能性をもっている人々の営みであること」とは、社会科を専門としていない教員でも活用したくなる人々の営みを指す。本研究部の実践を旭川の各小学校に広めることで、子どもの資質・能力のさらなる向上を目指す。そのためにも、教材化しやすい人々の営みを選定する。

教材化にあたっては、地域素材を扱う利点を生かして、追究対象に関わる施設や工場等への調査・見学活動、ゲストティーチャーの招聘などを積極的に行う。直接、見たり聞いたり感じたりすることで、学びの対象をより身近なものとし、社会とのかかわりを実感させたい。ただし、「始めに地域素材の教材化ありき」にならないように留意する。学習指導要領に示された目標、内容と教材との整合を十分に吟味した上で中心教材または周辺教材として扱うようにする。

1 子どもが社会とのかかわりを深める教材開発

① 社会に対する関心を高める教材の選定

中学校

1-①
社会に対する
関心を高める
教材の選定

社会科は、社会認識を高める学習を通して公民的資質を養うことを目指した内容的な教科である。そのため、変化の激しい時代にあつて、どのような内容を教材化していくかが今まで以上に問われている。

では、どのような内容を教材化していくかという、「このような力を身に付けさせたい」という、目標に沿いながら適切に内容を選択し、授業を構想していくことが重要になる。目標に沿った教材の開発であるということが求められる。

目標に沿い、「社会に対する関心を高める」教材を発掘するため、以下の視点を意識する。

■教材を発掘するための視点

- (1) 地域の問題から社会の本質に迫り、社会参画への意識を高める教材を選定する。
- (2) 生徒が共感できる人の営みに焦点を当てる。
- (3) 主体的な学びを引き出す教材を選定する。

「地域の問題」を取り上げる意図は以下の通りである。

生徒が社会科学習を通して、自分たちの住む地域に興味・関心をもち、そこから地域と自分とのかかわりについて考えることは大切である。地域教材は、生徒が直接体験できたり、具体的なイメージをもつことができたり、生徒が地域社会の一員として、また、自分の問題として自覚できるものであると考える。

目標に沿って地域素材を取り上げ、具体的事例を通して社会の本質に迫り、社会参画につながる事例を教材化していくことは生徒の学びを確かなものにしていくために有効であると考えている。

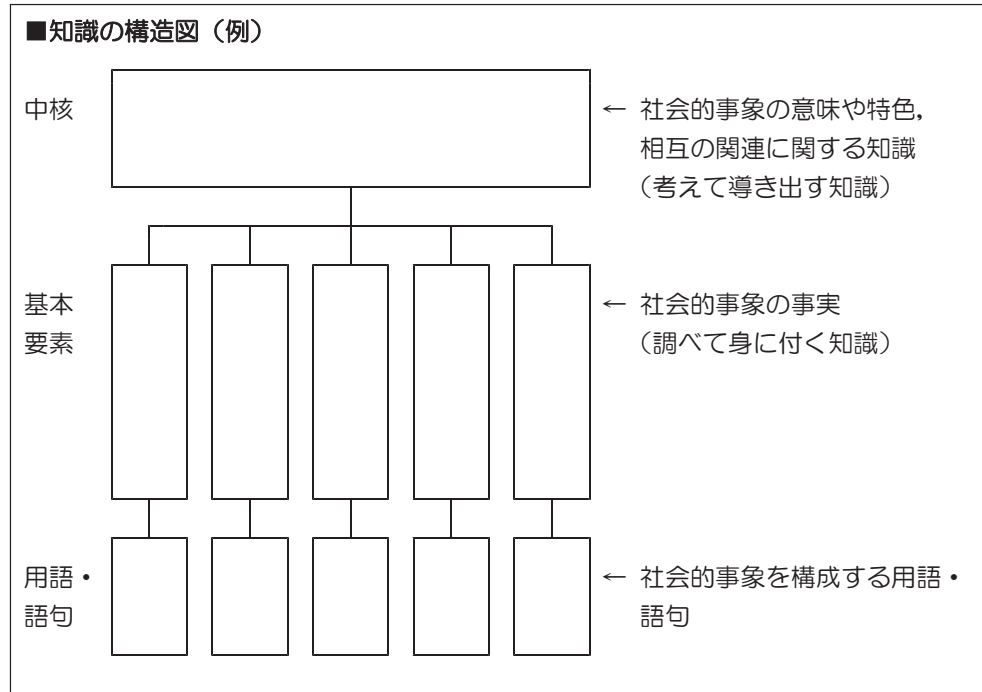
「生徒が共感できる人の営み」とは、例えば、地理的分野や公民的分野では「地域の発展に寄与した人」「生活の向上を目指して活動している人」「様々な問題を克服し、粘り強く生きる人」、また歴史的分野では「時代を変えるキーパーソンの特徴的な事例」などを取り上げることにより、問題を具体的に捉え、主体的な学びを促すとともに、理解を様々な問題に対して、具体的に働きかけていく視点をもつ生徒を育てていくことにつなげていきたい。

「主体的な学びを引き出す教材」が意図するところは、社会科が苦手、嫌いという生徒も多い中、生徒が「面白そうだ」「できそうだ」「やってみたい」と思える教材開発を行うことにある。下位層の生徒も主体的に学びを続け、そして、社会の本質に迫っていくことができる教材を大切にしていきたい。

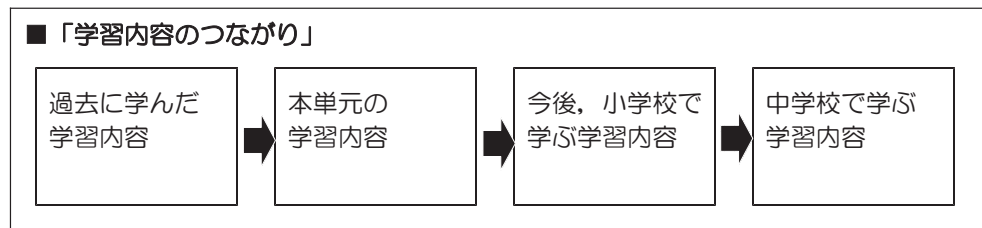
小学校

1-②
小・中7年間
を見通した身
に付けるべき
知識・技能の
明確化

社会とのかかわりを深めることができる教材にするには、社会的事象に関わる多様な知識を構造的に示す必要がある。そこで「知識の構造図」を用いて、身に付けるべき質の高い知識を構造的に示す。



また、小・中連携の観点から、7年間の学習内容のつながりも明確にする。そうすることで、計画的・系統的な指導をすることを目指す。



さらに、単元を通して身に付ける技能についても明確にする。

■「単元を通して身に付ける技能」

目的	← 学習指導要領に示された項目の中から選択する
場面	← 評価場面と整合させる
具体	← 身に付ける技能について具体的に表す

1 子どもが社会とのかかわりを深める教材開発

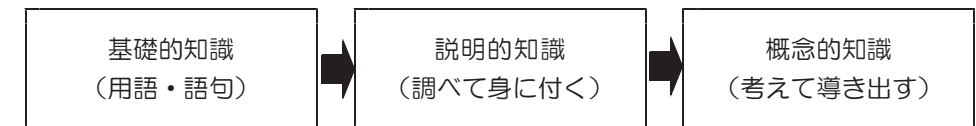
② 小・中7年間を見通した身に付けるべき知識・技能の明確化

中学校

1-②
小・中7年間
を見通した身
に付けるべき
知識・技能の
明確化

私たちは概念的知識を獲得させることが大切だと考えた。概念的知識は「一般的で普遍性のある他の事例にも応用性、転用性のある知識」であり、既習の知識を比較・関連させたり、調べ、考察し、焦点化、一般化させたりすることで習得できるものである。

生徒が授業を通して理解した断片的な知識を一本の線でつなげたり、組み合わせたりする中で、既習の知識が新しい知識として生まれ変わる。そのためにも、単元や本時の中で「何が概念的知識なのか」を明らかにすることが重要となる。その上で、概念的知識を導き出すためにどんな基礎的な知識が必要なのか、構造的に考えて知識を整理することが大切だと考え、次のような知識のつながりで整理したい。



さらに、中学校の教員が見落としがちとなるのが、小学校でどのような学習を行っているのかという点である。知識のつながりに小学校での既習内容を改めて整理し、上記の知識のつながりと合わせて「知識の構造図」で明らかにしていきたい。

今までの研究の実践を通して、「概念的知識の獲得」が生徒にとって難易度が高く、なかなかそこまで迫ることができないという反省点があった。よって、単元・授業レベルで概念的知識獲得のため、どのような指導に重点をおくかについても「知識の構造図」の中に位置付けていきたい。

「知識の構造図」については下記の表を基本とし、具体については、各分野の実践で提案していきたい。

■知識の構造図（例）

小学校での既習知識		
*小学校までの既習内容を学年と単元を明らかにして、簡潔に記載する。 *基礎的知識や説明的知識に小学校での学習をふまえたものは白抜き文字で記載する。		
基礎的知識	説明的知識	概念的知識へつなげる指導の重点
*用語や語句 (人物名、できごとや年代、地名や位置など)	*基礎的知識を用いたり、資料を調べる中から手に入れたりする知識	*概念的知識へ最終的に導くために、単元の段階ごとで重視したい学習やそのための指導の具体
概念的知識		
*説明的知識を活用して最終的に導き出され、獲得される一般的・普遍的知識		

なお、資料の読み取りなどの「技能」面は、指導の重点が明確になってこなかった反省を生かし、単元や本時の中で、身に付けさせたい技能について明らかにしていきたい。

小学校

1-③
目的や表現方法を熟考した資料の作成・提示

児童が教材を理解するために重要になってくるのが、学習資料（以下、資料）である。具体的には、実物、映像、画像、統計、文書など、様々な方法で資料化されるが、作成・提示にあたっては、目的や表現方法を熟考する。

■資料の作成・提示にあたって意識すること

- (1) 明確な意図をもって資料作成のための情報収集すること
- (2) 学年に応じた表現で作成すること
- (3) 児童の関心や理解度を高める教育効果の高い提示の工夫をすること
- (4) 資料を提示した後、見る視点や活用方法を指導すること

「明確な意図」とは、児童が資料を基にして何を考えたり理解したりするかを明確にするということである。明確な意図をもって資料作成のための情報収集をする。

■資料の主な性質

①実感的側面

- 「活動・仕事・生活の様子」
- ・写真や動画などの資料
- ・見学、調査活動、模擬体験 等



③共感的側面

- 「思いや願い」
- ・人々への取材内容の資料
- ・ゲストティーチャーの話 等

②科学的側面

- 「数値等のデータ」
- ・グラフや地図、年表にまとめられた資料 等

※社会的事象の意味や特色、相互の関連に迫るためには、小単元内で①から③の資料をバランスよく用いる必要がある

児童にとって難解な表現で構成された資料は、効果が半減する。そこで、学年に応じた表現で作成する。特に表やグラフについては、算数科の学習系統に基づいて配慮し、作成する。もし、未学習の表現方法を用いる場合は、丁寧な指導が必要となる。

提示にあたっては、教育効果を踏まえ方法を工夫をする。例えば、見学活動ができない

場合は、動画で見せることで疑似体験をさせたり、ゲストティーチャーとして招聘したりする方法が考えられる。また、実物投影機やタブレット端末などを活用し、児童の印象に残る見せ方も考えられる。なお、全体の様子を動きで見せたいときは動画を用い、様子を焦点化させたいときは静止画を用いるなど、資料を用いる意図を明確にする。

小学校においては、資料を提示した際には、活用の視点・方法を丁寧に指導する。この積み重ねが中学校社会での技能活用につながると考える。

■算数科における

各種グラフや表の読み方・かき方

- 3年 棒グラフ、簡単な二次元表
- 4年 折れ線グラフ、二次元表
- 5年 帯グラフ、円グラフ
- 6年 度数分布表、柱状グラフ

1 子どもが社会とのかかわりを深める教材開発
③ 目的や表現方法を熟考した資料の作成・提示

中学校

1-③
目的や表現方法を熟考した資料の作成・提示

学習資料（以下、資料）を通して教材を「見える化」し、生徒の学びを深めるのに有効なものとなるために、作成については以下の点を意識する。

■資料の作成・提示にあたって意識すること

- 何を考えさせ、何を理解させるかという明確な意図をもって作成する。
 - 多様な視点からアプローチし、多面的・多角的に考察できる資料であるか。
 - 社会的事象に対して、見方や考え方を高めることができる資料であるか。
 - 概念的知識を考察する根拠として、適切に活用できる資料であるか。

生徒の実態や学習状況に応じた資料を作成する。

生徒の関心や理解度を高める教育効果の高い資料を作成する。

必要に応じて、資料の使い方を指導する。

資料を効果的に活用するために以下の点を意識する。

■学習資料の効果的な活用にあたって意識すること

学習内容に応じて、単元や授業の中でどのような目的（疑問を生む、調べる、確かめる等）をもって、どの時点でどのように提示するのか。

資料に対して、どのような発問で生徒に考えさせたり、理解させたりするのか。

資料はどれだけ与えるのか。資料の読み取りに重点を置くのか。選択させるのか。適切なものを見付けさせるのか。総合的に考えさせるのか。

小学校で身に付けた「資料を正しく読み取る力」を深化させ、「資料を根拠として考察する力」を身に付けさせる視点で資料の工夫に取り組み、各分野での具体的実践において提案していきたい。

小学校

2-①
学習問題（課題）と向き合いながら、子どもが主体的に追究する単元構成

「目指す子ども像」に迫るためには、社会的事象に対する疑問や気づきを主体的に追究・解決できる問題解決的な学習を展開することが大切である。そこで、小単元において次のようなサイクルを基本として単元構成を図る。

■学習問題と向き合いながら、主体的に追究する単元構成【例】

学習過程	学習プロセス	学びの達成度
つかむ	<input type="checkbox"/> 社会的事象と出会う <input type="checkbox"/> 社会的事象への疑問・気づきをもつ <input type="checkbox"/> 学習問題（例「どのように～」を設定する） <input type="checkbox"/> 問題解決の見通しをもつ	学びの振り返り
調べる	<input type="checkbox"/> 見通しに基づき情報収集をする <input type="checkbox"/> 情報交換をする	
まとめる	<input type="checkbox"/> 情報を整理する <input type="checkbox"/> 整理した情報を基に学習問題のまとめを考える ※整理した情報に人々の営みの価値が内在していることに目を向ける	
深く考える	<input type="checkbox"/> 学習問題のまとめについて深く考える ※人々の営みの価値を追究する <input type="checkbox"/> 単元を通した学びの振り返りをする	

「つかむ」では、社会的事象に興味や疑問をもち、調べる内容を明確にすることを大切にす。ここでは、社会的事象の提示の仕方、学習問題を自分ごととして捉えさせる方法などの工夫を図る。

「調べる」では、解決の見通しに基づいて効果的に情報収集・交換をすることを大切にす。ここでは、学習形態、観察・調査・資料活用の仕方の指導、資料の内容や提示の仕方などの工夫を図る。

「まとめる」では、収集・交換した情報を整理するとともに、人々の営みの価値へと目を向けるきっかけづくりを大切にす。ここでは、情報の整理の仕方、人々の営みの価値に注目させるきっかけのつくり方、学習問題と正対したまとめ方などの工夫を図る。

「深く考える」では、人々の営みの価値を追究することを大切にす。そこで、学習問題のまとめを深めるための「新たな問い」を導き出す方法や活発な話し合いを促す方法、話し合いを収束させ中核に迫る方法などの工夫を図る。

なお、単元を通して、学びの状況や成果を振り返る場として「学びの振り返り」を設定す。この積み重ねによって、学びの充実感や達成感を自覚させる。

2 子どもが主体的・協働的に追究する学習展開

① 学習問題（課題）と向き合いながら、子どもが主体的に追究する単元構成

中学校

2-①
学習問題（課題）と向き合いながら、子どもが主体的に追究する単元構成

中学校研究委員会では、一つのテーマで複数の時間を使って問題解決的な学習を行う1スパンを「ユニット」と呼び、長年、ユニットのあり方を研究してきた。ユニットとは、「事象との出会い」「学習課題の設定」「追究・解決」「発展」の4段階で構成される。このユニットを単元の中に位置付け（または単元全体をユニット全体として捉え）、主体的・協働的な学びを追究していきたい。以下の表は、ユニットの基本的な学習過程を示したものである。

■主体的・協働的な学習を促し、追究を深めるユニットの学習過程

	生徒の追究過程	教師の指導	学びの振り返り
事象との出会い	<input type="checkbox"/> 興味・関心をもつ <input type="checkbox"/> 今までの学習や生活経験からとらえる <input type="checkbox"/> 疑問や問いをもつ <input type="checkbox"/> 社会的事象を観察し読み取る <input type="checkbox"/> 仲間と共に疑問や問い、観察し読み取ったことなどを共有する <input type="checkbox"/> 追究への見通しをもつ	<input type="checkbox"/> 感性に響く力のある事象を準備する <input type="checkbox"/> 問題意識、関心や生活経験を把握する <input type="checkbox"/> 学習内容や教材提示の工夫 <input type="checkbox"/> 問題発見力を高める工夫 <input type="checkbox"/> 作業的、体験的活動の設定 <input type="checkbox"/> 内発的学習意欲の喚起 ※主体的に学習に取り組む態度	
学習課題の設定	<input type="checkbox"/> 「知りたい」「調べたい」ことを決める（集約→整理） <input type="checkbox"/> 学習目標を把握する <input type="checkbox"/> 学習課題の設定（ユニットをつらぬく課題）	<input type="checkbox"/> 問題を焦点化させる（問題→課題） <input type="checkbox"/> 生徒に学習目標を理解させることを含んだ学習目標をたてる 学習課題（ユニットを貫く課題）の設定 <input type="checkbox"/> 仮説の設定 <input type="checkbox"/> 解決の方法を探る（調査方法・手順の確認）	
追究・解決	<input type="checkbox"/> 見学、調査、体験などや収集・分析した資料から課題に対する考えをもつ（調べ方を学ぶ） <input type="checkbox"/> 多面的・多角的な視点によるアプローチ 見学、調査、作業的、体験的な活動の導入	<input type="checkbox"/> 多様な学習活動の設定 <input type="checkbox"/> 学習活動の複線化 <input type="checkbox"/> 追究力を高める工夫 ※思考・判断・表現 ※知識・技能 <input type="checkbox"/> 調べた事実や自分の考えを表現する方法を工夫する 発表・交流（討論や話し合いを中心とした練り合い） <input type="checkbox"/> 交流を通して、事象の本質に迫る <input type="checkbox"/> 様々な立場や考え方を理解し、公正に判断する <input type="checkbox"/> 概念的知識を見いだす	
発展	<input type="checkbox"/> 学んだことを他の社会的事象につなげる <input type="checkbox"/> 社会にかかわり続ける意欲をもつ <input type="checkbox"/> 自己を振り返り、人々の願いや生き方に迫る <input type="checkbox"/> 新たな疑問や関心をもつ	<input type="checkbox"/> 交流によって、問題の所在の明確化と問題を解決する方向性をもたせる <input type="checkbox"/> 学習内容を一般化し、概念的知識に絞り込む ※知識・技能 <input type="checkbox"/> 自己評価や相互評価から自己効力感をもたせる <input type="checkbox"/> 主体的に行動する態度を高める <input type="checkbox"/> 次の単元に向けて、意欲付けを図る。 ※主体的に学習に取り組む態度	

小学校

2-②
社会的事象の
意味や特色、
相互の関連、
概念について
協働的に考え
る授業構成

小学校では、社会的事象の意味や特色、相互の関連に関する知識（中核）を人々の営みの価値に注目することで明確にする。そのためには、既習内容や追加資料、他者の考えを基に自らの考えを広げ、深めることが大切である。そこで、次のようなサイクルを基本として、教師の適切な指導の下、協働的に考えを深め、中核に迫るようにする。

■社会的事象の意味や特色、相互の関連について協働的に考える授業構成【例】

過程	児童の活動	教師のかかわり
問いをもつ場	□新たな問いをもつ	□新たな問いの必要性を共通認識させるための工夫（資料等）
考えをつなぎ、深める場	□個で考える ・既習内容の活用 ・「空間的」「時間的」「関係的」な視点	□思考を可視化・活性化させるための工夫 （板書、学習ノート、ICT、思考ツール、学習形態等） □思考を収束させるための工夫 （追加資料、発問等）
	□集団で考える ・考えを説明し合う ・追加資料の提示 ・考えを深め合う	
答えをまとめる場	□個で答えをまとめる	□主体的にまとめることができるようにするための工夫（板書等）
学びを振り返る場	□学びの振り返り ・学びの状況や成果	

「問いをもつ場」では、これまでの学習を基に人々の営みの価値について考えようとする共通認識が大切である。そこで、資料の内容や提示の仕方の工夫を図る。

「考えをもち、深める場」では、考えを説明し合い、深め合うために、思考の可視化と活性化が大切である。そこで、板書や学習ノート、ICT、思考ツール等の活用方法の工夫、個別・小集団・一斉などの目的に応じた学習形態の工夫を図る。また、自他の考えを収束し、中核に迫ることができるように、追加資料の内容や提示の仕方を工夫し、発問内容を吟味を図る。

「答えをまとめる場」では、これまでに協働的に学んできた学習内容を個に戻って考え、整理することが大切である。そのためには、1単位時間の学習の流れが分かる板書の構造化を図る。

「学びを振り返る場」では、「答えをまとめる場」同様に個に戻り、学びの状況や成果を振り返る。児童の発言や記述に充実感や達成感の表れていることを期待する。

2 子どもが主体的・協働的に追究する学習展開

② 社会的事象の意味や特色、相互の関連、概念について協働的に考える授業構成

中学校

2-②
社会的事象の
意味や特色、
相互の関連、
概念について
協働的に考え
る授業構成

共に学び合い、他者とかかわりながら高め合う学習を進めるために、授業の中に「練り合い」と呼ぶ話し合い活動を設定してきた。問題解決的な学習の中で、多面的・多角的な見方や考え方は育まれていくが、特に他者の見方や考え方に触れながら議論するなどの場面が大切と考え、この「練り合い」を授業の中に位置付けてきた。この「練り合い」で大切にすることが以下の4つである。

■「練り合い」で大切にすること

- 目標をもつ
 - ・生徒自身が「練り合い」の目標や課題、まとめ方の見直しをもつ。
- 受容する
 - ・生徒自身が他者の意見を聞くことにより、様々な考え方に触れる。
- 深める
 - ・生徒が学んだことを、相手に質問しながら思考を深める。
- 表現する
 - ・生徒が学んだことを、意見として述べたり、レポート等で表現したりする。

この「練り合い」を指導する上で、次の5点に留意していきたい。

■「練り合い」を指導する上で留意すること

- 練り合いのテーマ（ねらい）を吟味する。
- 練り合いの目的を明確にし、練り合い後の生徒の変容の姿を想定する。
- 練り合いの手順や形態を工夫し、明らかにする。
- 練り合いの様子を把握し、適切な助言をする。
- 発表や表現の方法を工夫する。

「練り合い」による協働的な学びは、最終的には個々の学びへと返っていく。よって協働的に学んだことを自分の言葉でまとめる場を設定していく。

また、この「練り合い」が概念的知識へと導く活動となることを大切にしたい。生徒が授業を通して獲得した断片的な知識をつなぎ合わせ、既存の知識が概念的知識へと形成していく。この過程が主体的・協働的な学びの場であることが社会参画の芽を育む重要な要素となると考えるからである。そのために、次の4つの場面を大切にしていきたい。

■「練り合い」で大切に場面

- 他者の発表や見方にふれて、迷ったり悩んだりする。
- 他者の発表や考えに対して、自分との共通点や相違点に気づき、それらを指摘する。
- 他者の発表を聞きながら納得したり、自分の考えを深める。
- 生徒が練り合いによって出した考えに揺さぶりを掛けたり、新たな視点を与えたりする教師の働きかけを工夫する。

小学校

2-③
子どもの資質・能力をバランスよく育むための評価

未来社会を生き抜くための資質・能力として、「個別の知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力・人間性等」を育むことが求められている。

そこで、単元・授業構成にあたっては、以下の3点を意識して学習評価に向き合い、指導改善や学びの充実を目指す。

学習評価にあたって意識すること

- (1) 「三つの柱」に基づく評価規準と評価方法を適切に位置付ける
- (2) 児童の反応や状態を表した具体的な評価規準を設定する
- (3) 知識の定着を目指し、形成的評価の視点で確認プリントを作成・実施する

基本的には1単位時間に1観点の評価活動を行う。単元を通してすべての観点をバランスよく評価するとともに、指導改善や学びの充実に生かすことを目指す。

■小単元における主な評価場面【例】

学習過程	学習プロセス	知 技	思 判 表	主
つかむ	<input type="checkbox"/> 社会的事象と出会う	○	---	◎
	<input type="checkbox"/> 社会的事象への気付きや疑問をもつ	---	---	◎
	<input type="checkbox"/> 学習問題を設定する	---	○	◎
	<input type="checkbox"/> 問題解決の見通しをもつ	---	◎	○
調べる	<input type="checkbox"/> 見通しに基づき情報収集をする	◎	---	---
	<input type="checkbox"/> 情報交換をする	◎	---	---
まとめる	<input type="checkbox"/> 調べたことを整理する	◎	○	---
	<input type="checkbox"/> 整理したことを基に学習問題のまとめを考える	○	◎	---
深く考える	<input type="checkbox"/> これまでの学びを生かして深く考える	---	◎	○
	<input type="checkbox"/> 単元を通じた学びの振り返りをする	---	---	◎

※知技…知識・技能 思判表…思考力・判断力・表現力
主…主体的に学習に取り組む態度

評価規準については、「A（十分に満足できる状況）」「B（おおむね満足できる状況）」「C（努力を要する状況）」に分類して表す。また、教師側の問い掛けを明確にし、それに対してどのような反応をしたかを具体的な文言で表す。なお、「C」には付属して、「B」に迫るための「具体的な支援の手立て」を用意する。

確認プリントの作成・実施にあたっては、問題解決に必要な情報収集ができていないか、身に付いているかを確認する簡単な形式のものとする。主に「調べる」の学習時に宿題や朝学習などで短時間で実施する。

2 子どもが主体的・協働的に追究する学習展開

③ 子どもの資質・能力をバランスよく育むための評価

中学校

2-③
子どもの資質・能力をバランスよく育むための評価

ユニットの中に観点別評価を位置付け、見取りの場面を設定し、指導の改善や学びの充実に生かしていくこととする。

ユニット内の評価の基本としては、事象との出会いでは「主体的に学習に取り組む態度」を位置付け、これからの学習に対する関心・意欲を高めることを大切にす。ユニットを貫く課題を設定し、関心・意欲の持続と学びの充実を図る。

追究過程で「思考・判断・表現」「知識・技能（とりわけ技能面）」を高め、概念的知識を獲得する場面では、「知識・技能」の定着を位置付け、生徒の概念的知識の定着を目指していきたい。

さらに発展では、次の学習に対する新たな疑問の喚起や意欲をもたせる活動を通して「主体的に学習に取り組む態度」の評価を位置付けることを基本とする。

それぞれの評価場面では、「B」評価に達しない生徒へは具体的な支援の手立てを講じる。

■主なユニット内の評価場面

学習過程	学習プロセス	評価の観点
事象との出会い 学習課題の設定	学習課題を設定する。 課題解決への見通しをもつ。	主体的に学習に取り組む態度
追究・解決	多面的・多角的に様々な視点による課題を追究する。 調べた事実や自分の考えを表現する方法を工夫する 概念的知識を見いだす。	知識・技能 思考・判断・表現 知識・技能
発 展	学んだことを社会的事象につなげる。 新たな問いや疑問をもつ。	主体的に学習に取り組む態度

自己評価の視点から、学習を振り返る評価プリントを作成する。生徒が教師とのやりとりの中で自分の学習を振り返りながら学習を積み上げる。それらに関連させたり、既習事項を大きく捉えたりしながら概念的知識へと向かわせたい。

そのためには、単元レベルで個々の確実な知識の定着を促し、今までの自分の学びを一枚のプリントで要点を振り返り、概念的知識獲得の場面で生かせるプリントが有効であると考えている。